

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



なごや
ちくさ
WEEKLY

名古屋千種ロータリークラブ
承認 1982年 8月24日
例会日 火曜日 12:30
例会場 愛知厚生年金会館
事務局 千464 千種区池下一丁目4番18号
井上ビル4F D号
Tel 763-5110
会長 竹内真三

No.28 (1983~1984)

みんなにロータリーを —— みんなに奉仕を
Share Rotary —— Serve People

1983~84年度RI会長 ウィリアムE. スケルトン

第72回例会 昭和59年1月17日(火) 晴

◇ “我等の生業”

◇出席報告

会員 52(51)名 出席 38名
出席率 74.51%

◇前回 1月10日(修正出席率) 98.04% make up

水野(賀)君(1/13北)

◇ビジター紹介 6名

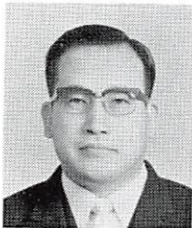
◇誕生日祝福

加藤(正)君(1/2)

◇ニコボックス

前尾張第一分区代理相 羽君(あけましておめでとうございます、今年もよろしく)、水野(民)君(中京テレビで田原俊彦がP&Sに来て全国放映されました、又本日中日新聞に“豚とボウリング”が掲載されます)、宮尾君(13日、長女が誕生しました)、加藤(正)君(誕生祝)、谷口君(結婚記念祝)

◇新入会員紹介



氏名 小坂井 盛雄君
生年月日 大正14年2月18日
事業所 英和産業株式会社
中区新栄2-10-25
TEL 251-0231
地位 社長
自宅 千種区朝岡町3-71-2
推薦者 松居敬二
職業分類 一般事務機械

◇竹内会長挨拶

先週の例会では会長の独りよがりとお申しますか、三河、いや尾張漫才の北川さんの御一同をお招きして千種R.C.の前途と会員の弥栄を大いに祝って頂きました。お正月気分も成人式が済むまで、ここらあたりで気分を引きしめて参らねばならぬところでしょう。

私事に涉りますが、我が家ではここ再三年お正月には中国からの留学生諸君をお招きして、遠く異境での越年を迎えられる優秀なる諸君に少しでも新玉の気分を味わって頂こうと共々お正月を祝う習慣に致しております。

今年も5名の留学生をお迎えて元旦を過ぎたことです。中国での大学進学率は5%前後と聞いております。日本の大学進学率は30~40%であります。特殊学校を含んでおりませんので、それを考えますと日本ではもっと高率の大学進学率ではなかろうかと存じます。

さてその8億とも否もっとそれ以上ともいわれる中国民衆の中の5%の大学生の中から日本への留学生は更に選抜されるのです。まさに明治維新の時に各藩より選りすぐりの秀才を欧米へ研修のために派遣した故事と全く同じでありますから、どれほど優秀な学生か御理解できるでしょう。

今年、私と一緒にお正月のおせちを楽しんだのは女性1名、男性4名でありました。

すでに中国で、所定の地位を固めた上で名大とか名工大へ留学をしているものもあれば、全く一学生として留学しているものもあります。その中の一人は名大を終え大学院への試験はパスしたけれども、本国(中国)からの経済援助は大学までですので、どうやりくりしようかと困っているとのことでした。

当クラブの米山奨学生として『劉君』をお迎えしていることは大変に誇りにしています

が、彼は「台湾」からの米山留学生であります。私共のクラブでは米山の功労者は水野前会長と古川米山委員長だけでありますので余りきついことは申せませんが、若し私が身近にいる彼ら中国からの留学生に何らかの支援をしたいと思っても、米山奨学金はロータリーの存在しない国からの留学生は対象からはずされて、中国他、社会主義国からの留学生はその恩恵に浴せないのが実状です。国際委員長の林君とも一度研究して頂きたいのは、真の国際理解、世界平和に取り組もうというのならば、『日本の米山』から社会主義国からのそれら留学生に対して門戸をかいほうする手段はないものかと考え、又主張して頂きたいのです。

ちなみに、現在在名している留学生は、大別して①訪問学者②中国留学生（中国政府派遣）③友交都市交換学生（名古屋市・南京市のごとく）④私費（日本に親類・知人のある者）⑤外務省研修員の5グループに類別できるようです。

ロータリー交換学生といい、米山留学生といい、下手をすると内輪同志のニュアンスが強いように感じられます。

今日の世界の不協和音を察しますに、この内輪の交流も大切ではありますが、更に体制の違う国々に対しても、私共民間のサービスグループこそ手をさしのべて、それらの垣根を除いていくことが肝要で、水野前会長の口癖の『着物の裏地のようなもの』的存在に、米山奨学金が生きてくるのではないのでしょうか。

財団活動も『単にお金を出せばいい』という運動から、出したお金が『いかに生きて使われているか』が明瞭になりませんか、空しいこととなって単なる寄付の強要になりかねません。

前途ある中国からの留学生諸君とお正月を過ぎましてR.C.の財団活動に対しての私の感想を申し上げます御挨拶いたします。

◇講演

“遊びと文化”

中日新聞客員

加藤鎮司氏

(紹介者 鈴木(猛)君)



人間の生甲斐は遊びか、仕事かを考える時、示唆的なのは、紀元前四世紀のギリシャで生まれ、共に栄えたストイシズム（禁欲主義）とエピキュリアニズム（快樂主義）である。

だが、洋の東西を問わず、国家形成以後、支配的であったのは仕事中心主義的な禁欲主義である。生産性が低く、貧しかった庶民は、遊びに耽る余裕はなく、刻苦勉強、ひたすら働くことが人間の本務と考えざるを得なかったし、競って富国強兵を旨とした国家・権力は、庶民が禁欲主義を信じ一信じ込ませることが望ましかったからでもある。日本でも武士道、葉隠一そして明治以後は欧米先進国に追いつけというので、禁欲主義を旨として日本人は世界に類のない働き人間となった。

だが、二十世紀半になると技術革新によって、余暇が急増し、自由主義の拡大と相俟って、かつては特権階級が独占していた遊びが庶民・大衆のものとなり、禁欲主義一仕事中心主義は衰弱し、快樂主義一が遊志向主義へと転回しつつある。それと共に、一あらゆる文化は遊びから生まれ、遊ぶことで鍛えられる。一と論破したホイジンガを先駆として、遊びと人間、遊びと文化の不可分を解明する論求が活発になった。

さまざまな論考を通じて遊びの本質は、自由、自主的、自発性を第一として、日常性からの乖離、結果・プロセスの不確実性、非生産性などといえる。この本質に照らし合わせると、誰しもが遊べるようになったのに、真に遊んでいるかとなると甚だ疑わしい。

殊に日本人は遊びが下手である。多くの遊びは、資本と技術がコントロールするレジャー産業に鬻弄されているし、会社の上役などにおもねったり、義理で遊ぶなど日常性べったりだったりする。海外旅行でも1カ所でのんびり永く滞在することの好きな欧米人に対し、日本人は出来るだけ多くのものを見ようと動き回わり、足早に、息せき切って歩くのは日本人といわれ、ゴルフでもハンディを良くするのに懸命だったりするなど、遊びのなかにも生産性と効率を持ち込みがちだ。

余暇はさらに増え、遊び志向の風潮はさらに高まる。人類は地球運命共同体として多くのグローバルな難問を抱えている。そうしたなかで、豊かな生きざまを旨とせず、個人的で切実な課題は、増えゆく余暇にどう対応するか、如何に遊ぶか、ということだろう。

◇次回例会（1月24日）

講演 “私の仕事（設計事務所の近況）”

会員 松藤 国弘 君

◇次々回例会（1月31日）

講演 “ロサンゼルス・オリンピック”

会員 菅原 宣彦 君